



守りつつ、攻める—イタリアで垣間見る歴史とアーカイブズ—

人間文化研究機構 国文学研究資料館 湯上 良

水の都は紙の都

世界に名だたる観光都市、水の都ヴェネツィアには、あまり知られていないもう一つの顔がある。この都市は、千年以上に渡って続いた共和国の首都であったが、その間に作成された無数の文書が、街中の文書館や図書館で保存、活用されている。国立ヴェネツィア文書館には、書架総延長 80km 以上のアーカイブズが収蔵され、これは、イタリア共和国内に収蔵されている旧体制国家のアーカイブズの中で最も多い物量である。国立文書館だけではなく、国立図書館、市立の歴史文書館や博物館付属図書館、各種学術機関や財団、大学など、さまざまな機関が歴史的アーカイブズから 20 世紀の文書までを管理・運用し、まさに「紙の都」とも呼べる状況なのだ（また、羊皮紙も多い）。

2012 年の統計によると、イタリア全土の国立文書館の年間利用者数は、28 万人で、その内、年間 1 万人超の利用者が訪れる文書館は、トリノ、アスティ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマの国立文書館と国立中央文書館である。その中でもヴェネツィアは、イタリア人の利用者 9,118 人に対し、外国人の利用者数も全体の約 3 分の 1 に当たる 4,550 人と、突出した比率になっている。これは、かつてのヴェネツィア共和国から派遣された大使が各国の情勢を事細かに記していたことから、ヴェネツィア関係の研究者以外も当地の文書館で調査を行う実情が如実に反映されている。

ヴェネツィアを離れて他の地域に目を転じ



国立中央文書館

てみても、各地の国立文書館は、おもに国の地方機関のアーカイブズや、各都市を首都としていた近世以前の国家のアーカイブズを担当し、全土に網の目のように広がり、ほぼ各県庁所在地に設置されている。また、中央省庁のアーカイブズを担当する国立中央文書館は、ローマ郊外の近代的なエウル地区に所在している。

国の機関以外が作成したアーカイブズを保護するため、助言や監視を行う、文書保護局というイタリア独自の国の機関も設置されている。同局は、私企業のアーカイブズにも目を配り、アーカイブズを観光資源化し、「イタリア」のブランド価値を強化する取り組みを行っている。イタリアでは、いわば文書館で「守り」、保護局で「攻め」の体制を取っており、後ほど事例を見ていこう。

世界最小にして、最長

イタリア共和国に囲まれた世界最小の国、バチカン市国にも多数のアーカイブズ関連機関が存在する。教皇の身の回りに関する文書



バチカン美術館中庭

を中心に、多くの文書が保存されている枢密文書館（機密文書館と訳される事が多いが、機密文書のみを扱っているわけではない）を始め、国務省、福音宣教省、教理省など各省庁で文書管理を行っている機関も多い。枢密文書館の書庫は、バチカン美術館内の中庭の真下に広がる広大なもので、フランス革命以前の古い所蔵文書の書架総延長は、イタリア共和国の各国立文書館のものよりも長い。

また省庁だけではなく、イエズス会など修道会が独自の文書館を備えている例も見られる。

さらに、バチカン図書館にも数十年とは桁違いの、何世紀前にもさかのぼることのできる歴史的な文書や書籍が保存されている。日本の江戸時代の切支丹史料で、禁教政策の一端が解明されるであろう「マレガ文書」の管理もこちらで行われている。この図書館では、古い書籍の管理方法として、書籍の1ページを1アイテムとし、節や章を上位の階層構造とみなす、アーカイブズ的な管理・記述方法である EAD を採用しているのも興味深い。

アーキビストたちの日常

「アーカイブズの国」イタリアで、アーキビストはどんな日常を送っているのだろうか。友人たちの生活を垣間見てみよう。イタリアのアーキビストは国家資格で、アーカイブズ学や法律、歴史学の素養をもつ専門職である。

国立ヴェネツィア文書館に長年勤めていたベテランのアーキビスト、クラウディアは、数年前から国立ベッルーノ文書館と国立トリ

エステ文書館の館長となり、最近までヴェネツィアの自宅から、週初めにどちらかの都市へ通勤し、週の間に移動、平日は出先での生活を送っていた。どちらの都市へも電車で2時間以上かかる上、本数も少なく、スト等の不確定要因もあるため、相当な苦労を強いられる勤務環境である。しかし、どちらの文書館でも、持ち前の快活さで館員たちと仕事に取り組む意欲的な姿が印象的であった。

一方、駆け出しのアーキビストであるモニカは、長年待ち望んだ末に国立ヴェネツィア文書館にようやく採用となり、日々、汗を流している。先日は、同館に所蔵されている「支倉文書」が仙台に貸し出された際、展示終了後の文書を引き取るため来日した。東京では和食に舌鼓も打ち、すっかり日本が気に入ったそうだ。

アーキビストたちの朝は早く、開館時間である8時10分よりも前に出勤することもある。利用者は、アーキビストたちが閲覧室内で日に3時間ほど解説の手助けや、目当ての文書を探し出す手伝いをする姿しか目にしないことが一般的である。しかし、アーキビストたちは、裏手の書庫や事務所で所蔵文書や納入文書の管理、講演会や展示会の準備など、さまざまな事務作業も行っている。また、併設の古文書学校や大学の教壇にも立つため、アーカイブズ学や歴史学、法学等の授業準備にも余念がなく、論文の執筆も行う。

終業後には、二人とも文書館に通う研究者や全く別業種で働く友人らを自宅に招いて、食事会を開くこともある。アーキビストたちは、料理上手が多く、他のベテランのアーキビストも日頃のストレスは、料理作りで晴らすと言っていた。

守り、攻める文書保護局

冒頭で紹介した文書保護局は、2014年末まではほぼ各州に設置されていたが、現在は統廃合が進み、効率化が図られている。同局は、地方公共団体や私企業、各種団体の所有するアーカイブズの管理や運用のためのガイドラ

インを策定し、調査を行い、関連プロジェクトを実施する。また、大規模な災害やテロ等が発生した場合、アーカイブズの救出作業を行う。各団体と密接に協業し、アーカイブズ運用において非常に重要な役割を果たしている。例えば、2012年5月にエミリア地方で起こった地震では、同地を管轄する文書保護局が消防と協力し、州内各地の地方公共団体が所有するアーカイブズの救出を行った。また、トスカーナ文書保護局は、河川の氾濫で被害を受けた地方公共団体のアーカイブズを救い、復旧作業に協力した。さらに、かつてフィレンツェ中心部でマフィアによる爆弾テロ事件が起きた際も塵煙の上がる中、アーカイブズの救出に当たり、身を挺した活動にも従事する。

また、文書保護局は、「文化財および景観法」に基づいて、「最重要歴史的価値宣言」を発する権限をもっている。この宣言によって、対象アーカイブズを所有する団体や個人は、アーカイブズの保護・修復作業にかかる費用に対し、税控除が受けられ、国からの補助金支出が認められる場合もある。一方、対象アーカイブズを散逸や廃棄・破損から守り、整理や目録化を行い、外国へ一時的に輸出や修復を行う際、国に許可を申請する義務が課せられる。また、所在地の変更や国が先買権を行使することが予想される場合は、事前通

知をしなければならない。文書保護局を通じて、閲覧請求をした研究者に許可を与えることも求められ、権利と義務を通じて、非国有アーカイブズに対して、国が手を差し伸べる制度になっている。

息つき、根づく「歴史」

近年、イタリアでは、アーキビストの高齢化も進み、予算の削減も進められ、厳しい環境に直面している。一方で、数年前に立ち上げられた全国アーカイブズシステム Sistema Archivistico Nazionale、通称 SAN では、モードや自動車、デザインの特許など、「メイド・イン・イタリア」の屋台骨を支えるアーカイブズだけでなく、建築や音楽など芸術を情報資源として再活用する試みが行われ、数値には表れにくいイタリアの「無形の力」を感じさせる。また、こうした「攻め」のソフトパワーだけではなく、年代ごとに参照できる歴史地図、テロや虐殺等の歴史記憶、オーラルヒストリーなど、広く国民にかかわる内容も充実させている。今後もこうしたアーカイブズを通じ、「歴史認識」を育む場がさらに豊かになることであろう。

※写真は、中京大学特定研究「公文書管理制度に関する国際比較研究」による。この場を借りて御礼申し上げる。